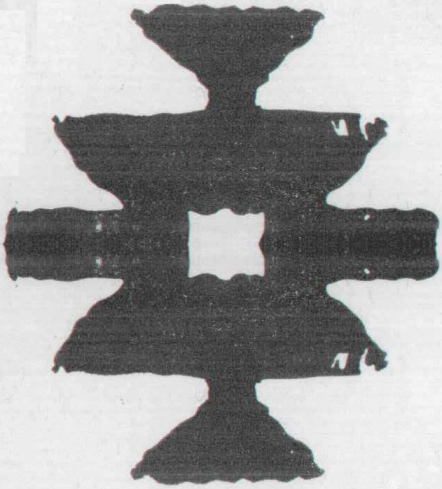
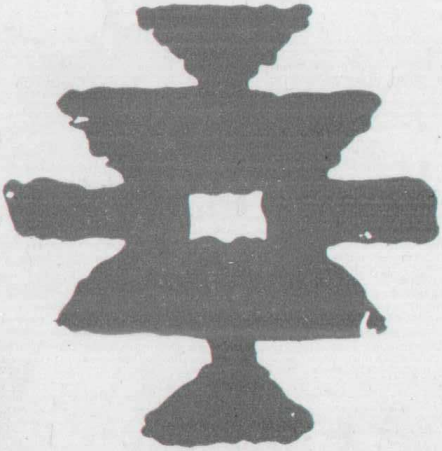
# 犬養道子
# 随想集
## 初めに終りを思う



# 犬養道子
# 随想集
# 初めに終りを思う

河出書房刊



# 初めに終りを思う

**著者略歴**　大正 11 年東京に生まれる。津田英学塾中退，パリ大学卒業。1948 年渡米，さらに欧州各地を遊歴して 1957 年帰国する。現在評論家として多方面に活躍。著書に「お嬢さん放浪記」「世界のトップレディ」などがある。

検印廃止

昭和 39 年 5 月 25 日　印刷
昭和 39 年 5 月 30 日　発行

定価　450 円

著者　犬養道子
発行者　河出孝雄
印刷者　小笠原秀雄

東京都千代田区神田小川町 3 の 8
発行所　株式会社 河出書房新社　振替口座 東京 10802　電話 東京 (291) 3721

© 1964

印刷　秀好堂　製本　美行製本

# 目次

## I 初めに終りを思う


初めに終りを思う……二
旧約雑感……三
アラゴンの句……一一
カトリシズムと私……一五
青い鳥――それは、そこにいる――……一七
「親切」と「当然」……二〇
十分と三分……二三
太陽を運ぶ……二四
犬の死……二六
ドストエーフスキイと今日……二八

## II 日々の随想

この道あの道……三〇
筆と葡萄——重宝と不重宝——あるひとすじ——間——ウェルトのこと——匂い——食療法——ノーベル賞の代議士——ある味わい——平和——髪形——中華料理——国際性——言葉と実体——申し込み——ユーモアのすすめ——結婚道具——ふるさと——指輪——はるかなる夢——密度——チョコレート——遊ぶ知恵——アフリカの教訓——ほめる——たのしみ——ロード・ショー——てんぷら——「知らない」「出来ない」——ドッグ・フード——環境——俳句——食療法ふたたび——食療法みたび——私の献立——富士——思うまま——天然自然——やさしい——記念写真——小さい大きい——逆の戸——△△の日——書つれづれ——話す——あるひと——ゴルフ場で——若さ——死

きのうきょう……二三
ケネディのこと——パリ祭背景——エラトの医者——ひとりわずらい——あるアメリカ人——文化生活——祖父と水——自然の呼び声——パパの葬式——病棟の夜——私の心配——お国柄——姿見——目撃者——あのころ——眠れぬままに——続・眠れぬままに——文化の日——ワシントンのリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ス――人を見る――看護婦――斎藤博のこと――刃物――八百屋の店先で――定期券――灰色の六〇年――一大事――十字架――ハンコ――一芸――ダイヤル一一〇――パリの老人――税の季節――羽田にて――ひな人形――P君へ――流行おくれ――東洋のナポリ――板ばかりの道――バーの話――友を送る――マッチ――谷間で――ビルマの首相――ポーランドの記者――ミュンヘンにて――首席裁判官――職業人――モンブランの前で――東洋のスイス――サヴォアの料理――哀歌

## Ⅲ 日本のこと

日本人の親切――ヨーロッパで考えたこと――……一八〇
片道切符の日本……一九二
片道文化交流論――英字新聞をめぐって――……二〇一
生きた英語への道……二一九
どこかが狂っている――イタリアから帰って――……二三二
人造りにひとこと……二四一
町づくりにひとこと……二四四

## Ⅳ 旅で思ったこと

公式論へのある疑問——東アフリカ日記——……二四八
二十一世紀の大陸……二六六
一つの思案——パリ日記——……二七四
ヨーロッパ的なもの……二七八
低地方の言葉……二九四

## Ⅴ 忘れ得ぬ人々

原智恵子さんのこと……三〇〇
ノエルベーカーさん……三〇三
モラヴィアと一時間……三〇五
モリアック家にて……三一一
父のこと……三一五
あとがき……三二三

# I

# 初めに終りを思う

# 初めに終りを思う

教会暦というものがある。カトリック教会が用いる一年の暦で、春は生命を、夏は種蒔きを、秋は人生のみのりをというふうに、季節のリズム感をたくみに取り入れながら、それにふさわしい聖書の章を、各週にわりあてたものである。その暦の巻頭、すなわち新年の章は、死をめぐる考察（ルカ二十一）ではじまる。

新しい日、新しい年、いずれも私たちを一歩、死に近づけるものである。生命はすべて、始まった瞬間、すでに死を目前に置いている。否、生命ばかりではない。手近な例を取ってみれば、原稿を書き始める時、人は何をいいたいかを――つまり結着を――考えている。彫刻師が像を彫る時、女が衣を縫う時、料理をつくる時……すべて、「終り」は考えられている。そうでなければ良い仕事は出来ない。

私は死というものを、ポール・クローデルが解釈したと同じふうに意味づけて考える。「それは人生におけるクライマックスであり、その一つの人生中に散在する一切をまとめ上げる総決算である」

人はいつ死ぬかわからない。死は聖書のいうごとく「盗人のように」突然やって来るかもしれぬ。疊の上で死ぬかタクシーにはね飛ばされて逝くか、長病いの苦しみの中にか。しかし、わかっていることは、われわれの生涯がいつかは終るということである。そして、終ったらそれきり。

人類はじまって以来今後幾百億の人が生きるか知らぬが、私という個性の存在はただ一度きりのものなのである。

それならば、いつ来るかわからぬ死が、いつ来ても、少なくも「私は私なりにせい一杯に生きた」という平安感を抱いて死ねるような、個性に充ちた、全宇宙ただ一回ただ一個の人生を、今日この瞬間生きたいと思う。

一歩ずつ近づくわが終りを思うことは、縁起の悪いことではないように私は考える。むしろ、終りを念頭に置くことによって、元旦に立てる一年の計も、より本質的な真摯なものとなり得るのではあるまいか。

（一九六二年「婦人公論」一月号）

## 旧約雑感

私が旧約聖書というものに、はじめて興味を覚えたのは、もうかれこれ十五年も前になろうか。戦争の終った翌年であったから。

それは四旬節の時季だった。

四旬節とは、毎年春三月から四月にかけての、復活祭以前の四十日（厳密にいえば、春分から数えて最初の満月後の日曜日を復活祭とするから、年によっては四旬節は二月からはじまることもある）の呼び名であって、これは、キリスト受難の金曜日、その前夜である「最後の晩餐」の木曜日、さらには旧約「出エジプト記」に記される虜囚時代から自由の身への「過越し」の、

実質的な成就と目される復活の暁――これはまたキリストの生涯の事業の成就でもあるのだが――を、終止点ともクライマックスともするだけに、キリストの生涯のはじめを祝うクリスマスとは、比較にならぬ重さを以って、教会暦の中では扱われるのである。クリスマスは心なごむ家庭的な祝日ではあっても、教会暦の上の格としてはむしろささやかなもの、オクターブと呼ばれる、いわば祝日のリフレインを、いついつまでも残す復活祭は、同じ重さと余韻とを以って、四十日の序曲をも奏でる。

この四十日の間、ミサ中の朗読は、その他の季節と少しく異なって、パウロなどの新約の書簡朗読から、キリスト以前の薄明の時代旧約に立ち戻る。晩禱や朝の祈りにおいても、イスラエルの民が父祖アブラハムを通してある時（西紀前二〇〇〇年から一八五〇年にかけての頃と推定される）知った「光への道」を踏み出して以来、あるいは囚われとなり、異国の文化に触れ、あるいはさすらい、また国家形態にまとまって栄華に酔い、あるいは内面の分裂に傷つきつつ、その道の成就に向かって歩んでゆく、はるかな旅路のプロセスを、一章ごとに追うのである。

そして、この四旬節の典礼（Liturgia）は、最後の週間に至って、比類ない美しさと荘重さとを帯びはじめる。一貫したテーマに貫かれて、素朴な単調な古いしらべで歌われる詩篇やエレミア哀歌の抜萃個所は圧巻であり、その朗読を通して人々は、イスラエルの民に象徴される人間そのものの内面のドラマを改めて見直すであろう。

人間の内深く秘められた闇と、それにもかかわらずすべての人が求めてやまない光と救いへのあこがれの交錯……すべての人に問いかけられる「死」と「生」の永遠の課題……。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春分後の満月が窓外に冷たく光る夕べであった。花も絵画も、一切の装飾を取り去って、きびしく素朴さに包まれた堂の中に、修道僧の読む旧約の数節が、単調なグレゴリオのしらべに乗って流れる。中世初期に整えられたこの晩禱では、もちろん朗読も原典にはよらず、ラテン訳が使用されるために、ラテン的な洗練が多分に濃く出てはいたが、しかし古拙ともいえそうな旧約の単純美は損われてはいなかった。あの一見煩雑厖大な書物各書を選ばれた抜萃の統合によって、はじめて一つの互いに関連しあった総合として聞いた私は、ひどく強い印象を受けて、動揺さえしたのであった。

以来、私は一年に一度、四旬節の時季には旧約を読みかえすことにした。読むたびに、新しい感銘を受けるのは、すべてのすぐれた古典についていえることだが、ことに先年イスラエルの地を訪れて、旧約の風土に心と眼で触れてからは、その感銘はひとしお新鮮なものとなった。

諸外国に——といっても私の歩いた範囲の西洋と中近東に限るのだが——行ってみると、どれほど聖書というものが、生活の中まで浸みこんでいるか、いっそ驚くばかりである。ホテルやホステルの部屋には、何はなくとも手垢のついた聖書が具えてあることが多いし、日常の会話の中にも文学的な引用として、あるいは「誰でもが知っている」比喩として、たびたび聖書は顔を出す。名高い彫刻やフレスコやモザイクの前に立てば、ほとんどの場合そのモチーフは旧約から新約への流れの中に汲まれている。紅海のほとりの土地ともなれば、文字通り一木一草、旧約の色彩に染まって、その世界に馴染みのない者には、親切な案内人の懇切な言葉も、単語だけわかって文章はさっぱりという「異国のもの」と聞こえる。人々はエルザレムに「のぼる」という。た

とえ飛行機で上空から降りて来ても、やはり「のぼる」のである。それは旧約のメンタリティだ。象徴的な意味あいでの「エルザレム」の地位が、人々にこの形容を語らせるのである。

古典中の古典の一つである宗教文学書を、西洋から近東にかけての一帯の文化遺産と生活感情の理解のために読むという実用主義は、あるいは邪道であるかも知れない。が、私は、西洋の文物に接しようとするすべての人々に、ユデオ・クリスチャニズムの根幹をなすこの書の一読をすすめたい。そこには、二十世紀の今日までなお生きつづけている西洋精神文化の伝統の一つの基礎がある。その基礎とは、人間・自然界とはまったく異なった次元に超絶する、絶対的存在としての神概念と、そこから生まれる思想の立体性である。

だが、一読をすすめたいとはいっても、旧約は読みやすい本ではない。何しろ十五世紀もの長い期間にまたがって徐々に書かれ完成されていった書物である。しかも、一派一閥の伝承ではなくて、エホバ派、エロイ派、申命派、祭司派など異なる派流の筆がまじりあって、しばしばテーマは復奏する。それにまた、最古の部分と最新の部分との間に横たわる時代的なずれ——それはまた、この書物を生んだ民族が遊牧の原始状態から都市文化を持つ国民へと移ってゆく、成長のずれでもあるのだが——を勘定に入れて読まないと、矛盾撞着にぶつかって解釈はちぐはぐになる。すべての原始的な民がそうであるように、この民族もまた、稚い時代には「個人」の概念にはすこぶる乏しく、善きにつけ悪しきにつけ、民族は連帯の一集団として動きもし考えもした。だから最古の部分にあたるペンタトコス（モイゼ五書）には、たびたび村や町があたかも一人の人間であるかのごとくに擬人視して画かれる。

このような状態だった民族に、「神の啓示」は、掟を破ることがあれば、当の本人ばかりでな

く、その父も母も兄弟も罰を受けるであろうという、連帯罰則をもってはじめにはのぞんだのである。また、草原に羊を追い、砂漠に水を求めて行動するプリミティブな人間の激しさは、異民族から受けた恥辱や暴行に、何倍かの復讐をするのが常だった。そういう血なまぐさい民族を教えるのに、旧約はまず「目には目を、歯には歯を」の、つまり最も原始的な「平等の正義」を示している。

だから、正義は旧約初期にはおそるべきものであり、神もまた、酷しさの中に超絶する怒りの神である。この時代の旧約各書だけをひろい読んで、やがて愛を中心に説かれるはずの「新約」との間に、何らの「関連」を見出し得ない人が多いのも、むしろ当然といってよい。

しかし、年月とともに、イスラエルは文化的に成長する。もはや「集団」の中に没することなく、一人一人は理性と意志をもって自らを御する「個人」として認識されはじめる。いかなる大罪人を父とする者であっても、その人間が正道をゆく限り、彼は光明を得るであろう。因縁の絆を断って、個々が自らの運命のにない手となるという思想が、最もはっきりとあらわれるのは、旧約最後期のダニエル書十―十二である。

「目には生命を」が「目には目を」の正義に進み、さらに真の正義は愛である――すなわち、神の欲するところは愛であり、神自身もまた、その本質において愛であるという、新約のいわば前兆が教えとしてはじめて旧約にあらわれるのは、イスラエル自身がソロモンの栄華のあとで分裂し、その内面の苦悩によって一つの成熟をとげたころ、紀元前七百年代であって、その画期的な「啓示」を歌ったのは、予言者オゼアである。イザヤやエレミアのような格調高い詩人ではなかったが、この人は巧みなイメージをゆたかに使って、田園風なリリシズムの中に、後年の雅歌の

麗わしさを思わせる愛の讃歌をうたいあげた。彼の歌はまた、外面の律法遵守に走りすぎるイスラエルに、宗教の内面性をつよく教えたことによっても旧約中特筆されてよいといえるだろう。

前に述べたダニエルと年代を等しくする部分の旧約には、ヘレニズムの影響がかなり見られる。ことに肉体とは別個に独自の不滅性を持つ霊魂の存在というような思潮は、明らかにプラトン哲学の移植である。多島の海を渡って、ギリシャとイスラエル間に、舟のゆき来がはげしかったことは、当時の歴史を見ればすぐにわかる。アテネからエルザレムに、また反対にエルザレムからアテネに、旧約を中心とする思潮交換は、セプタンテの旧約ギリシャ語などにも具体的にあらわれた。

先年、私はアテネの白い丘から飛び立って、テルアビブまでの空の旅をしたが、昔の舟路を容易にした多島の群をながめながら、脂ぎった人間臭い神々を持つギリシャと、これとはまっこうから対立する唯一神教のユディズムが、一番最初にはどの島づたいに出会ったのだろうかと、そんなことを考えた。

旧約を読むのに、ヘブライ語が最適であることはいうまでもないが、現代語本でも、エルザレム版は、非常によく出来ていて、はじめて読む者にも、この書を手離さない者にも絶好である。たとえば、多すぎるほどの傍注によって、各シラブルすべてに意味を持つヘブライ単語の説明を与えてくれるのだが、それを参照しながら読んでゆくのと、そうでないのとでは文章のコクがまったくちがう。

たとえば、「アブ」は、父を意味し、ベンは子を意味する。この二事がわかるだけでも、なん

と多くを理解することができるだろうか。また、ハムは人々を意味し、だからこそ、イスラエルの父祖は、自らの生涯の意義を悟った時に、アブラハムと呼ばれるようになったのである。彼こそ、人々の父となる人であったから。

イザアクの十二子の末子が、ベンジャミンと名づけられたのは、文字通りそれが末子を指すからで、だからこそベンジャミンの族はまた、イスラエル十二族の最後の族ともなるのである。西洋の国のつどいなどで、私の名はベンジャミンですが、親が急いでこの名をつけてしまったので、まだ下に弟がいます、などという自己紹介にどっと笑いが湧いたりするのは、やはりそれだけ、西洋の聖書の読み方は深いからでもあり、それだけ聖書が人々に知られているからでもあるのである。

生けるパンと自らを呼んだキリストが生まれたのはベトレヘムという所だが、ベトあるいはベイトは家を指し、ベト―レヘムは「パンの家」という、象徴的な地名であるし、新しいイスラエル国家の都会にある公民館――要するに「人々の家」――は、このベイトとアブラハムのハムとをつなげた、ベイトハムの名を持っている。

ただでさえ、（この頃ようやくその地域の風土や歴史や文化がかなり紹介されるようになったというものの）日本にとってはなじみ薄のパレスチナの、それも紀元前の物語りを日本の読者に伝えようとするならば、聖書の邦訳者は、せめてこのくらいの注解はつけてしかるべきであろう。

なぜなら、こういう名前のたぐいにせよ、地名にせよ、多くの諸民族の中で特に秀でて象徴的であるユダヤ民族の、象徴的な文脈の中では、おのおのが、名前以上の何かを読む者に告げるからなのである。アブラハムに「民の父」の注を付すのは、明治の頃に黒岩涙香が、「噫無情（ああむじょう）」のイボンヌをイボ子と書き直したのとはまったく意を異にする。

閑話休題――

オランダで二年。

パリで二年。

幸いによき師を得て私は旧約を学んだ。バビロン、アッシリアの同時代の文学と比較して、民俗史的に研究したり、巻尾の数巻（トビア、智書等々）に見られるギリシャ哲学、とくにプラトンの思想の影響がいかにユデイズムに新局面を与えたかなどをさぐる文化史的な考察をこころみたり、生かじりのヘブライ語で、たどたどしく言語学的分析の講義を追ったりするうちに、この一冊が、ひろい意味での文化史の巨大な宝庫であることをもあらためて知った。

舞台は、西と東の交わる地点であり、その思想からやがて流れ出るものは、西に西欧文化の基礎をきずくキリスト教であり、東と南にはアジア、アフリカに火のごとくひろがったイスラムである。二十世紀の今日、なお世界のほぼ半分以上の人々の心に生きる理念は、結局その源を、この一冊においているのだ。愛さないまでもせめてこの本を理解しようとつとめるそれだけで、多くの心にわだかまる見えない「国境」を取り去ることが、あるいは可能なのではあるまいか……。

旧約を愛するすべての人と同じく私もまた旧約の地パレスチナにあこがれた。そして五九年の夏、私は一冊の古ぼけた旧約を手に、夢を満たされた者の感動にふるえながら、ダビドの都エルザレムの丘に立っていた。栄華はもはやない。その代わり足下には、アウシュヴィッツその他犠牲者の記念碑がある。哀歌エレミアの時代は、まだ終ってはいなかった！　しかし、エレミアもまた、「待つ予言者」だった。そして旧約の人にとって、「待つ」とは、つくねんとすわることではない。それは自分の足で歩くことであり、また、人間の内面の醜さに敢然と立ち向かうことである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com